

序章: 砂上の肖像

剛(たけし)と美波(みなみ)の夫婦仲は、周囲の誰もが羨望を隠せないほど、理想的な調和を保っていた。二人の出会いは七年前に遡る。当時、中堅ゼネコンで現場監督としての頭角を現し始めていた剛は、仕事で訪れた取引先の受付に座っていた美波に一目惚れした。現在の美波は三十二歳。その美しさは、時の経過と共に磨かれ、落ち着いた清楚な気品を湛えている。抜けるように白い肌、手入れの行き届いた艶やかな黒髪、そして、派手さはないが質の良さを感じさせる服装。一見すると華奢な印象を与えるが、その実、タイトなスカートやタイトなニットを着れば、服の上からでもその肢体の豊かさが残酷なまでに強調された。豊かな胸の膨らみ、引き締まった腰のくびれ、そしてすらりと伸びた足。その完璧なスタイルは、剛という夫に対する彼女なりの献身であり、誇りでもあった。

対する剛は、男が惚れる男、という言葉で地で行く人物だった。身長は百八十センチを超え、長年の現場監理で培われた肉体は、安物のスーツであっても高級品に見せてしまうほどの逞しさを備えていた。仕事に対しては人一倍厳しく、職人たちを束ねる圧倒的な指導力と、不条理な要求を撥ね退ける強靱な精神。その潔癖なまでのプライドの高さが、彼のキャリアを不動のものにしていた。剛にとって、自分に寄り添う清楚な美波は、己の正しさを証明するための「鏡」だった。これほどまでに美しく、貞淑で、完璧な妻が自分を愛し、跪いている。それこそが、剛の男としての存在価値を担保する最大の大黒柱となっていたのである。

しかし、剛は露ほども知らない。美波のその慎ましやかな振る舞いが、過去の自分を殺して作り上げられた、精巧な「擬態」であることを。かつての美波——十数年前の彼女は、今の姿からは想像もつかない、狂乱の世界に生きていた。肌を褐色に焼き、燃えるような金髪をなびかせ、布面積の極端に少ない服で夜の街を闊歩する「ギャル」だったのだ。それも単なる遊び人ではない。特定のアンダーグラウンドなコミュニティにおいて、男たちの欲望を自在に操り、その中心で狂おしいほどの快楽を貪っていた「伝説」の片割れ。美波は、その激しすぎる過去を、剛という「誠実な器」に出会ったことで封印した。いや、封印したつもりになっていた。剛との歩みは、穏やかで幸福に満ちたものだった。三年の交際を経て結婚し、目黒の閑静な住宅街にマンションを購入した。剛の昇進、美波の献身的なサポート。二人の歩みは、まさに剛が描いた設計図通り、一段ずつ着実に高みへと登っていく階段のようだった。剛は、美波の過去を「少し派手な時期もあった普通の女の子」程度にしか認識していない。今の彼女が自分に向ける、あの潤んだ瞳と柔らかな微笑みが、すべて真実だと信じて疑わなかった。剛のプライドは、この安定した日常という地盤の上に築かれている。それが、あまりにも脆い砂の上に建っているとも知らずに。

第1章: 完遂の美酒

建設現場特有の、砂埃と重機の音、そして男たちの荒々しい熱気に満ちた日々から解放された瞬間、剛は深い安堵と共に、自分の中に確固たる誇りが満ちていくのを感じていた。三年に及ぶ大規模な再開発プロジェクト。その現場監督という重責を、彼は一人の落伍者も出さずにやり遂げた。この達成感、何物にも代えがたかった。夕闇が迫る都心のオフィス街。剛は、新調した仕立ての良いスーツを纏い、自慢の妻である美波が待つ高級レストランへと足を向けた。

「お疲れ様、剛さん。本当に、凄いわ。誇りに思うわ」

予約していた個室の扉を開けると、美波が最高の微笑みを持って彼を迎えた。薄桃色のシルクブラウスは、彼女の透き通るような白い肌を際立たせ、程よく開いた襟元からは、剛が去年の結婚記念日に贈った真珠のネックレスが鈍く輝いている。清楚という言葉を体現したような美波の姿は、剛にとって「男としての成功」を象徴する、何よりも価値のあるトロフィーだった。

「ああ、ようやく一段落だ。……きつかったが、この瞬間のために頑張れたようなもんだよ」

剛は、運ばれてきたシャンパングラスを掲げた。黄金色の泡が立ち上る。剛は、自分の人生が完璧な設計図通りに進んでいることを確信していた。三十五歳。仕事は絶好調。周囲からの信頼は厚く、そして何より、誰もが羨むような貞淑で美しい妻を独占している。彼のプライドは、この時、人生で最も高い場所に位置していた。

「ねえ、剛さん。今日は特別なお祝い。あなたの願いを何でも叶えてあげたいの。……何か、やってみたいことはない？」

美波が少し上目遣いに、甘えるような声を出す。清楚な妻が見せる、夜の気配を含んだ微笑み。それは剛の征服欲を心地よく刺激した。普段なら、高級な時計や海外旅行を望むところだった。しかし、今の剛は、自分の中の男としての器が無限に広がっているような、全能感に近い高揚感の中にいた。ふと、以前同僚たちが酒席で卑俗な笑いと共に話していた、ある隠密な場所の話題が頭をよぎる。

「……それなら、少し毛色の違う『冒険』をしてみないか」

剛は、自分の声がわずかに上気しているのに気づいた。美波を汚したいわけではない。ただ、この最高の妻を連れて、欲望が渦巻く場所に足を踏み入れ、そこで他の男たちに彼女を見せつけたい。自分がいかに優れた男であるか、この美しい所有物を通じて再確認したいという、強烈な顕示欲が鎌首をもたげたのだ。

「カップル喫茶、というところがあるらしい。……二人で、のぞいてみないか」

剛は、少し照れたような、それでいて自信に満ちた表情で提案した。美波は一瞬、驚いたように目を丸くした。その瞬間、彼女の脳裏をかつての光景が掠めたことに、剛は気づくはずもない。肌を焼き、男たちの視線を土足で踏み荒らしていたあの頃。彼女にとって、そういった場所は日常の延長線上にある戦場だった。しかし、彼女は即座に「貞淑な妻」の仮面を密着させる。

「えっ……。そんな、私、そういう場所はちょっと……。でも、剛さんがどうしてもって言うなら……」

困惑し、顔を赤らめる美波。その初々しい反応に、剛の独占欲は満たされていく。自分の愛する妻は、汚れなき聖域にいる。それを自分がエスコートし、大人の社交場を味わせてやる。それが、夫である自分の特権なのだ。

「大丈夫だ、俺がついている。美波の美しさを、少しだけ外の世界に自慢したいだけなんだよ」

剛は力強く、妻の手を握った。その逞しい手のひらの下で、美波の指先が、微かに、熱を帯びて震えた。それは恐怖ではなく、長く眠らせていた本能が、主人の許可を得て目覚めようとする歓喜の震えだった。

「……分かったわ。剛さんが、そう言うなら。私、あなたについていだけだから」

完璧に見えた夫婦の夜。シャンパンの最後の一口を飲み干した剛は、自らのプライドが、この先どう削り取られていくのか、その予兆すら感じていなかった。

第2章：深淵への第一歩と、疼きの予感

剛という男は、何事も完璧にこなさなければ気が済まない質だ。それは遊びであっても変わらない。美波にカップル喫茶行きを提案した翌日から、彼は慎重に、かつ熱心に情報収集を開始した。仕事の合間、信頼できる遊び仲間の同僚を飲みに誘い、さりげなくその手の店のシステムやマナーを、あたかも「現場の事前調査」のように聞き出したのである。「剛、あそこは『観賞』だけでも価値がある。自分の妻がどれだけ美しいか、他人の視線を通して再確認できる場所だぞ」同僚のその言葉は、剛の肥大した自尊心を激しくすぐった。（俺の美波なら、あんな場所にいる女たちの中でも、間違いなく一番輝くはずだ）剛は、美波を汚したいのではない。最高級の宝石を、その価値が分かる者たちが集まる場所に展示し、自分がその唯一の正当な所有者であることを誇示したい。そんな、歪んだ独占欲が彼の原動力だった。

一方、美波は、剛が熱心に店のホームページをチェックしたり、同僚と電話で隠語を交わしたりする姿を、複雑な心境で見つめていた。清楚な妻を演じている今の自分にとって、そこは忌まわしい過去の象徴だ。しかし、剛の期待に満ちた目を見るたびに、美波の胸の奥で、冷え切っていたはずの炭火が小さく爆ぜるような感覚があった。

「美波、まずは『見学』だけでいい。雰囲気を楽しむだけだ。嫌ならすぐに帰ればいいからな」

剛のその「紳土的」な配慮が、今の美波には皮肉に聞こえた。

迎えた初潜入の夜。雑居ビルの重厚な扉を開けると、そこには剛の想像を遥かに超える、淫靡で洗練された空間が広がっていた。剛は、美波の腰をしっかりと抱き寄せ、保護者であるかのように振る舞った。案内されたBOX席は、フロア全体を見渡せる位置にあった。店内は薄暗く、アロマと香水の入り混じった甘い匂いが立ち込めている。剛は、運ばれてきた酒を一口飲み、周囲を観察し始めた。そこでは、何組かのカップルがソファで肌を重ねていた。

「……凄いな。本当に、みんな隠さずにやっているんだな」

剛は圧倒されながらも、視線を逸らすことができなかった。特に、フロアの中央で、他の男たちに見守られながら絡み合う男女の姿に、彼の心臓は激しく脈打った。「美波、大丈夫か？」「……ええ。少し、びっくりしただけ。でも、なんだか……熱いわね」美波の声は細かった。だが、剛はその言葉を「妻が初心ゆえに興奮している」と解釈し、満足げに微笑んだ。その夜、二人は何もせず、ただ他のカップルが果てるまでを「見学」して店を後にした。帰りのタクシーの中、剛は饒舌だった。「どうだ、美波。あそこにいた誰よりも、お前が一番綺麗だった。みんなお前のことを見ていたぞ」剛は、妻が「見られた」ことへの優越感だけで、これまでにないほど激しく美波を抱いた。剛にとっては、それで十分だった。自分の妻が最高の女であることを、他人の視線によって証明された。その事実だけで、彼のプライドは満たされたのだ。

しかし、美波は違った。剛に抱かれながら、彼女は暗闇の中で目を開けていた。剛の愛撫は丁寧で、誠実だ。だが、今の彼女が求めているのは、そんな「正しい愛」ではなかった。店内で感じ

た、あの土足で心の中に踏み込まれるような、暴力的なまでの視線。もっと、壊されるような何か
が欲しい。欲求不満という黒いシミが、美波の胸の内に広がり始めていた。

二週間後。剛から「また行ってみないか」と誘うのに、時間はかからなかった。前回の「成功」に
自信を深めた彼は、今度はさらに一步踏み込むことを決めていた。「今日は、全裸になってみよ
う。触れ合うのは俺たち二人だけでいい。……ただ、服を脱ぐだけだ」

二度目の訪問。剛は慣れた手つきで「全裸エリア」への入場手続きを済ませた。更衣室で服を
脱ぎ、タオル一枚になった美波を、剛は誇らしげに眺める。三十代前半とは思えない、弾力のあ
る豊かな胸、くびれた腰、そして清楚な顔立ちに似合わない、長く美しい脚。「……美波。お前
は、本当に、俺の宝物だよ」 剛もまた、自信に満ちた肉体を晒し、美波の手を引いてエリア内へ
と進んだ。そこは、裸の男女が入り乱れ、あちこちで肉体がぶつかり合う音が響いている。 剛
は、空いているマットに美波を寝かせ、周囲の男たちに見せつけるように彼女の肌に指を這わせ
た。「ほら、みんな見てるぞ、美波」 やがて、ルールに従って「おさわり」程度の交流が始まっ
た。他のカップルの夫が、恐る恐る美波の肩や背中に手を触れる。剛はそれを、寛大な所有者の
ような笑みを浮かべて許容した。「いいですよ、それくらいなら。うちの妻は綺麗でしょう？」 剛
は男たちの羨望を浴び、有頂天になっていた。自分は余裕のある、懐の深い男なのだと。

だが、その指先が触れるたび、美波の体は絶望に近い飢餓感に震えていた。(……足りない。
こんな、遠慮がちな指先じゃ、何も感じない……！) 彼女が求めているのは、剛の許可を得た、
丁寧すぎる「おさわり」などではない。 剛のプライドを完膚なきまでに叩き潰し、自分を泥濘へと
引きずり戻してくれるような、荒々しい略奪。美波は剛の腕の中で、必死に「従順な妻」を演じ続
けた。「……んっ……。剛さん、私、恥ずかしい……」そう言いながら、彼女の瞳は、フロアの喧騒
の向こう側を、もっと暗く、深い淵を探していた。

剛は、満足していた。妻を全裸にし、他の男に少しだけ触れさせ、それでも最後は自分の腕の
中に帰ってくる。これ以上の優越感があるだろうか。「今日はこれくらいにしよう。……楽しかった
な、美波」 帰り際、剛は上機嫌でそう言った。美波は、微笑んで頷いた。しかし、その心は、次
に来るであろう「決定的な何か」を、狂おしいほどに待ち望んでいたのである。

第3章: 追憶の再会、塗り替えられる日常

三度目の訪問。剛(たけし)の足取りは、もはや躊躇(ちゅうちょ)のない、凱旋(がいせん)する
王のような堂々たるものだった。 二度の「成功」が、彼に致命的な誤解と、肥大した全能感を与
えていたのである。自分は妻の隠れた欲望を正しく管理し、安全な範囲で解放してやれる「器の
大きい夫」であるという、歪んだ、しかし強固な自負。それが、剛のプライドを支える黄金の支柱と
なっていた。 今回の目的は、単なる見学やおさわりではない。さらに一步踏み込んだ「本格的
なスワッピング」に向けた交渉である。剛は、自分と同等、あるいはそれ以上の社会的ステータス
を持つ「質の高い」カップルを物色しようと、一段と気合の入った仕立ての良いシャツを纏(まと)
い、自信に満ちた笑みを湛えていた。

店内の熱気は、過去二回よりも明らかに高く、濃密に感じられた。 週末の夜ということもあり、
全裸エリアは絡み合う肉体の波で埋め尽くされている。剛は、美波(みなみ)の腰をしっかりと抱
き寄せ、フロアの最奥にある、一段高くなったVIP用の半個室へと陣取った。ここなら、階下の狂
乱を余裕を持って見下ろしながら、自分たちのペースで獲物を選別できる。「美波、今日は俺も
少し開放的な気分なんだ。お前がもし、他の誰かと少し言葉を交わすくらいなら、俺は笑って見て

いてやれるよ」 剛は、自分の「所有物」の価値を他人に認めさせたいという、歪んだ自尊心に支配されていた。その傲慢なまでの自信が、彼を支える柱だった。

美波はいつものように、清楚な微笑みを浮かべて頷(うなず)いた。「ありがとう、剛さん。……少しだけ、お化粧を直してきてもいいかしら」「ああ、ゆっくりしてくるといい。お前がいない間、俺はここの景色を独り占めして待っているよ」 剛は満足げに、クリスタルのグラスに注がれた高価なシャンパンを一口飲んだ。美波が席を立つ際、薄いシルクのブラウス越しに揺れる胸のラインや、タイトなスカートが描く腰の曲線に、フロアの男たちが一斉に視線を送る。それを見て、剛は最高に心地よい征服感に浸っていた。

しかし、トイレへと向かう廊下を曲がった瞬間、美波の表情から「清楚な妻」の仮面が音を立てて剥がれ落ちた。 心臓の鼓動が、不自然なほどに速い。 店内の空気に混ざる、ある特定の匂い。安物の香水でもなく、高価な酒でもない。それは、かつて自分の人生を徹底的にかき乱し、骨の髄まで快楽に染め上げた、暴力的なまでの「雄」の残響。 洗面所の鏡の前で、美波は自分の顔を見つめた。剛好みの、薄化粧で清楚な女。だが、その瞳の奥には、今にも叫び出しそうな「獣」が、檻を蹴り破ろうとして潜んでいた。

「……相変わらず、窮屈そうな面(つら)をしてるな、お嬢」

低く、地を這うような声が背後から届いた。 美波は息を呑み、振り返ることができなかった。鏡の中に、死ぬまで忘れるはずのない男の姿が映っていたからだ。 健(たける)。 かつて美波がギャルとして夜の街を彷徨(さまよ)っていた頃、彼女のすべてを支配し、快楽の泥濘(でいねい)へと引きずり込んだ張本人。 彼は荒々しく近づくことはせず、ただ一歩、美波との距離を詰めた。その控えめな動作が、かえって美波の逃げ場を完全に塞(ふさ)いだ。

「健……さん」

その名を呼んだ瞬間、美波の脳裏に、封印していた「改装」——過去の情景が、濁流のように鮮烈に蘇(よみがえ)った。

——十年前。 まだ派手なメイクと短いスカートで自分を武装していた頃。美波は、健が経営する秘密のサロン「エリュシオン」の門を、自らの意志で叩いた。 当時の彼女は、死ぬほどに渴いていた。 普通の男たちが捧げてくる「可愛いね」という薄っぺらな賞賛や、壊れ物を扱うような優しくいたわる愛撫では、彼女の中の煮え立つような業火を鎮めることはできなかった。 彼女が本能的に求めていたのは、人格さえも溶かされるような、圧倒的な「略奪」と「支配」だった。 健のサロンは、そんな彼女の異常なまでの欲求を、唯一受け止めてくれる聖域だった。 健は初めて彼女を見た時、冷徹に言い放った。「お前は、愛されたいんじゃない。壊されたいんだな。その綺麗な皮の下にある、汚い中身を全部引きずり出してほしいんだろ」 その言葉に、美波の全身の産毛が逆立った。この男なら、自分をどこまでも墜(お)してくれる。そう確信した。

それからの日々は、快楽という名の過酷な調教だった。健は彼女の「恥じらい」という薄皮を一枚ずつ剥いでいき、ただの肉の塊として、欲情のままに鳴くことだけを許した。 健は決して強引ではなかったが、美波が最も屈辱を感じ、同時に最も歓喜する瞬間を、精密に、そして執拗(しつよう)に突き続けた。 首筋に噛み跡をつけられ、這いつくばらされ、何人もの男たちの視線の前で自分の醜態を晒(さら)される。その屈辱こそが、美波にとって最高の報酬だった。 剛のような、光り輝く場所で誠実に生きる男には、逆立ちしても想像できないような倒錯の世界。 しかし美波は、そこで初めて、自分が「生きている」ことを実感できたのだ。自分の意志で選んだ、最高の地獄。それが健との日々だった。

剛との出会いは、そんな燃え尽きる寸前の彼女にとって、穏やかで静かな「避難所」だった。誠実で、一本気で、自分を汚れなき聖女のように崇(あが)めてくれる男。彼と一緒にいれば、あの凶暴な快楽の記憶を忘れ、普通の幸せを手に入れられる。そう信じて、美波は「清楚な妻」という新しい皮を被り、完璧な演技を続けてきた。

だが、今。 健の指先が、美波の髪にそっと触れる。 その瞬間、剛が七年かけて積み上げてきた「聖女の虚像」が、内側から激しくひび割れ、崩壊し始めた。「あの男……旦那か。あんたのことを何も知らずに、宝物のように扱ってる。滑稽(こっけい)だな」 健の声は驚くほど優しく、しかし確実に、美波の理性を切り裂いていく。「お前が俺に縋(すが)り付いて、もっと、もっと壊してくれと泣いていた夜を……あいつは一秒も想像できないんだろうな。あんな温い、おままごのような愛撫で、お前が本当に満足していると思っているのか？」

美波の膝が、笑うように震えた。 健との歩み。それは、快楽によって自尊心をズタズタに引き裂き、その破片を背徳の喜びだけで再構築していく過程だった。 剛が守り続けてきた「美波」という器は、今、健の冷徹な言葉だけで、懐かしい泥の色に染まっていく。

「戻りなさい。旦那が待っているぞ」 健は、美波の首筋に、消えない呪いをかけるように小さく息を吹きかけた。「だが、お前はもう、あの男の指先じゃ満足できない。……そうだろ、美波。お前の身体は、もう俺の合図を待っている。さっきから、足の震えが止まっていないぞ」

美波は、ふらつく足取りでVIPルームへと戻った。 そこには、何も知らない剛が、寛大な、しかしどこか虚勢を張ったような笑みを浮かべて待っている。「遅かったな、美波。少し、飲みすぎたんじゃないか？」 剛のその声が、今はただ、ひどく遠く、空虚に響いた。 剛は美波の肩を抱き、自分の所有物であることを誇示するように強く引き寄せた。だが、美波の皮膚は、剛の温もりを拒絶するかのように、冷たく、硬く閉ざされていた。

美波の瞳に映るのは、目の前の夫ではなく、廊下の影で冷笑を浮かべていた健の姿。 剛のプライドは、まだ保たれている。 彼は自分が、妻に最高の快楽と幸福を与えている完璧な夫だと信じている。 しかし、彼が愛している「美波」という器の底には、すでに真っ黒な亀裂が入っていたのである。 そしてその亀裂から、かつての「狂い咲きの薔薇」としての本能が、泥を流し込みながら溢れ出しようとしていた。

第4章：社交場に現れた蛇

VIP用の半個室に戻った美波(みなみ)を、剛(たけし)は満足げな、しかしどこか独占欲を剥き出しにした笑みで迎えた。「遅かったじゃないか、美波。あまりに綺麗だから、誰かに拉致でもされたかと心配したよ」 剛は冗談めかして言いながら、美波の腰をぐいと引き寄せた。彼の手のひらには、自分の所有物を再確認するような力がこもっている。剛にとって、美波は自分の成功を証明する「最高の勲章」であり、その美しさを他人の羨望の眼差しに晒すことは、何物にも代えがたい快楽だった。 だが、剛の腕の中に収まった美波の体は、先ほどまでとは決定的に異なっていた。 見かけ上は、いつもの清楚で慎ましい妻だ。しかし、剛がその肩に触れる指先に、彼女は微かな、しかし明らかな拒絶の硬直を見せた。剛はそれを「場所の雰囲気 に当てられた恥じらい」だと解釈し、むしろその初々しさに、男としての征服欲を昂ぶらせていた。

その時、半個室の入り口に、一人の男が静かに姿を現した。先ほど廊下で美波の魂を揺さぶった男、健(たける)である。健は剛のような威圧的な肉体美を誇示するわけではない。だが、仕立てのいい黒のスリーピースを纏ったその立ち姿には、この淫靡な空間の主(あるじ)であるかのような、圧倒的な存在感があった。健は迷うことなく、剛と美波が座るテーブルへと近づき、剛の向かいの席に、許可も得ずに腰を下ろした。

「……失礼。素敵な奥方だ。あまりに目を引くので、つい声をかけたくなった」

健の声は、低く、落ち着いていた。だが、その言葉の裏には、剛の喉元にナイフを突きつけるような冷徹な響きがあった。剛は、自分の聖域を侵された不快感に、眉をひそめた。エリートとしてのプライドが、即座に男としての攻撃性を呼び覚ます。「どなたか存じませんが、私たちは今、夫婦でプライベートな時間を過ごしているんです。相席を許した覚えはありませんよ」剛はあえて丁寧な、しかし拒絶に満ちた口調で応じた。だが、健は剛の視線を真っ向から受け流し、ただ美波だけを、蛇が獲物を品定めするような粘着質な目で見つめた。

「夫婦、か。……なるほど、確かに傍目には、完璧な『理想の夫婦』に見えるな。旦那さん、あんたは運がいい。これほどまでに『清楚』で『貞淑』な妻を独占しているんだからな」

健は「清楚」という言葉を、あざ笑うような含みを持たせて発した。剛はその挑発的なニュアンスを敏感に察知し、顔を赤らめた。「当然だ。美波は俺にとって最高のパートナーだ。……あんたのような男に、何がわかる」「わかるとも。……女の『肌』というものは、嘘をつかないからな」

健はそう言うと、テーブルの上に置かれた美波の指先に、自分の視線をゆっくりと這わせた。美波は逃げることもできず、ただ健の視線に射抜かれ、呼吸を浅くしている。剛の心の中に、今まで感じたことのない黒い不安が、一滴の墨汁のように広がり始めた。この男は、何かを知っている。自分が一生かけても触れることのできない、美波の「深淵」を。

「なあ、旦那さん。あんた、自分の妻が、本当はどういう愛撫を求めているか、考えたことはあるか？ あんたが捧げているような、その丁寧で、清潔で、退屈な……『正しい愛』とやらで、本当に彼女が満たされていると思っているのか？」

健の言葉は、剛の自尊心を一枚ずつ剥いでいく拷問のようだった。剛は必死に声を絞り出す。「ふざけるな！ 美波は俺を愛している。俺たちの性生活に不満などあるはずがない！」「そうか。……なら、試してみるか？」

健は残酷な笑みを浮かべ、美波の足元に視線を落とした。「旦那さん。あんたの隣にいるその『聖女』はな、実は……首筋の特定の場所を、ほんの少し強く噛まれるだけで、理性が飛ぶんだ。……それも、あんたのように優しく甘噛みするんじゃない。獲物を屠る獣のように、深く、鋭く。……そうされることで、彼女は自分がただの『肉』であることを思い出し、歓喜に震えるんだよ」

剛の全身に、冷たい汗が吹き出した。なぜ。なぜこの男が、俺さえも深くは立ち入らなかった美波の「反応」を、これほどまでに具体的に語れるのか。剛は隣の美波を見た。否定してくれ。この男の言っていることはすべて出鱈目だと、いつもの清楚な声で笑い飛ばしてくれ。だが、美波は答えない。彼女はただ、膝の上で手を固く握りしめ、健の言葉に呼応するように、全身を微かに、しかし激しく痙攣させていた。その頬は、剛が一度も見たことがないほどに紅潮し、瞳は虚空を見つめて、湿った光を放っている。

「美波……嘘、だよな？ この男の言ってることなんて……」

剛の声は、もはや情けないほどに震えていた。 健は立ち上がり、ゆっくりと美波の背後に回った。剛はそれを制止しようとしたが、健の放つ圧倒的な「支配者」のオーラに圧され、体が金縛りにあったように動かない。 健は美波の耳元に顔を寄せ、剛に見せつけるように、彼女の豊かな黒髪を指先で弄んだ。

「お前がかつて、俺に言った言葉を覚えているか？ 『剛さんの愛は眩しすぎて、息が詰まる』……。お前は、光の中にいたいんじゃない。俺という影の中で、泥に塗れて鳴いていたいんだろ、ミナ」

ミナ。 その略称を聞いた瞬間、美波の口から、漏れてはいけない吐息が漏れた。「……あ、っ……」 それは、剛の前では決して見せない、堕ちた女の、淫らな快樂の肯定だった。

剛のプライドは、この時、完全に瓦解した。 自分が信じてきた「清楚な美波」は、この健という男が作り上げ、そして飽きて捨てた「残骸」に過ぎなかったのではないか。自分が大事に育て、愛でてきた花は、すでに他人の手によって根こそぎ犯され、枯れ果てていたのではないか。 剛は、自分の手元にあるはずの「成功」が、砂のように指の間からこぼれ落ちていくのを、ただ呆然と見守るしかなかった。

「さあ、旦那さん。ショーはこれからだ。あんたの目の前で、この『聖女』をもう一度、俺の『道具』に戻してやろう」

健の手が、美波の細い首筋に伸びる。 剛の目の前で、絶望という名の、最も贅沢な官能が幕を開けようとしていた。 エリート夫としての自尊心はズタズタに引き裂かれ、彼は今、妻を奪われていく自分自身に、言いようのない倒錯した興奮を覚え始めていることにすら、まだ気づいていなかった。

続く